

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 28 日現在

機関番号：50101

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26284090

研究課題名(和文) 中近世のアイヌ文化の再構築をめざした学融合的研究

研究課題名(英文) The integrated studies for the reconstruction of Ainu culture in the middle and early modern period

研究代表者

中村 和之 (Nakamura, Kazuyuki)

函館工業高等専門学校・一般人文系・教授

研究者番号：80342434

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 7,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、14～16世紀のアイヌ文化の状況を明らかにすることである。この時期は、近世のアイヌ文化の成立期であるが、文献史料と考古学資料が少ないため、状況がわかっていない。そのため、漢語・満洲語・日本語史料の調査を行うと同時に、遺物の成分分析や年代測定、それに遺跡の電磁探査など、さまざまな分析方法で情報を収集した。

その結果、14～15世紀の北海道でカリ石灰ガラスのガラス玉が発見された。本州でほとんどガラス玉が出土しないので、アムール河下流域からの玉と考えられる。この時期は、元・明朝がアムール河下流域に進出した時期に重なるので、北方からの影響が強くアイヌ文化に及んだことが推定できる。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to clarify the status of the Ainu culture of 14-16 century. This period is the establishment phase of the early modern Ainu culture. With little historical sources and archaeological materials, we have not had enough knowledge about the situation of that time. Therefore, we searched Chinese, Manchu and Japanese historical sources. And we have collected the information from archaeological materials in a variety of analytical method, for example chemical analysis, radiocarbon dating and electromagnetic exploration of ruins. As a result, the glass beads made by potash lime glass were excavated from the sites of Hokkaido in 14-15 century. The glass beads made in the same period are hardly excavated in Honshu, so it is considered that the glass beads were carried from the lower Amur Basin. The influence of the Yuan and Ming Dynasty had entered the lower Amur Basin. We can estimate the effect of the north area was strongly brought out to Ainu culture.

研究分野：アイヌ史

キーワード：アイヌ 交易 ガラス 出土銭貨 電磁探査 年代測定 金糸・銀糸 墓制

1. 研究開始当初の背景

近年のアイヌ史・アイヌ文化の研究では、交易を重視する傾向が強い。かつてはアイヌ社会が自給自足社会であるとの前提から、交易を軽視する傾向があった。1980年代の後半以降、交易や文化接触によるアイヌ文化の変容が注目されるようになった。一方、元・明・清代の中国語・満洲語史料の利用が進み、アムール河下流域・サハリン島を經由した交易とその交易品である蝦夷錦の存在が広く知られるようになった。このような遠隔地交易の存在は、アイヌ社会にどのような変化をもたらしたのか。しかし14~16世紀のアイヌ社会の状況が不明なため、この疑問に対する答えはまだ見いだされていない。

2. 研究の目的

本研究の目的は、14~16世紀のアイヌ文化の状況を明らかにすることである。擦文文化が終末を迎えるまでは考古学情報が存在し、日本語史料が多く残される近世以降は文献史料によってアイヌ文化の状況を知ることができる。しかし、12世紀ないしは13世紀初頭に擦文文化が終末を迎えると、考古学資料も文献史料も極端に少ない時期が続くことになる。14~16世紀は、近世アイヌ文化の成立期であるにもかかわらず、その状況がほとんどわからない空白の時代とされている。

この問題を解決するため、中国語・満洲語・日本語史料の網羅的な調査を行った。それと同時に、遺物の成分分析や年代測定、それに遺跡の電磁気探査など、さまざまな分析方法で、既存の考古学資料から新たな情報を収集することを試みた。この二つの方法を利用することになって、アイヌ文化の空白期を明らかにすることをめざした。

3. 研究の方法

(1) 文献史料の調査

『国朝文類』『大明実録』などの元・明代の中国語史料の調査、謝遂『職貢図』などの満洲語の調査、および中世・近世の日本語史料の調査を行った。

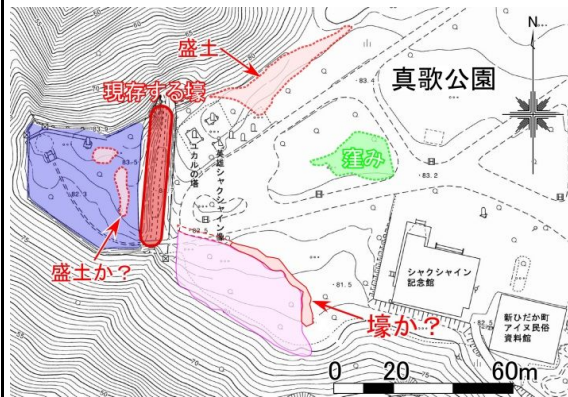
(2) 考古学情報の収集と遺物等の分析

擦文文化期を中心とする考古学情報の収集、および遺跡の電磁気探査、ガラス玉や金糸・銀糸などの成分分析、青銅製品の錆(緑青)などこれまで対象にされてこなかった試料を用いた放射性炭素年代測定などを実施した。

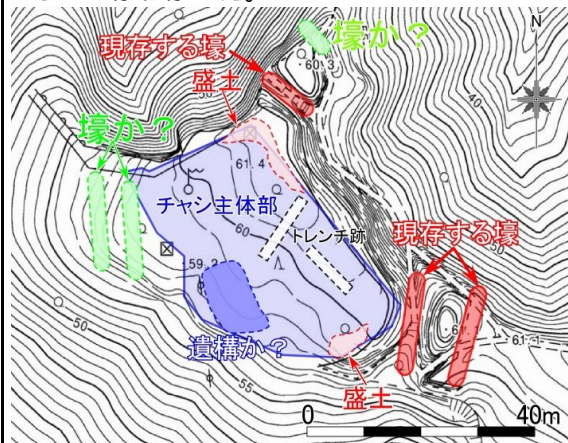
4. 研究成果

(1) 未発掘の遺跡の電磁気探査

新ひだか町の国指定史跡“シベチャリ川流域チャシ跡群”でレーダ探査を行った。シベチャリチャシ跡では、チャシの範囲が従来の説より広く、複数の壕を持つ堅牢な砦であることが示された。その成果を右上の図に示す。



またホイナシリチャシ跡は、下記の図のように、三方向に二重の壕を巡らした構造であることがわかった。



(2) 北海道から出土したガラス玉の成分分析
北海道内出土のガラス玉資料は、ここ10数年の調査で急激に数が増え、本研究による分析によって、北海道におけるガラスの変遷が明らかになってきた。

本州の弥生文化から古墳文化の時期に相当する縄文文化期に、北海道へもガラス玉が流入し、カリガラスの淡青色と紺色のガラス玉、植物灰ガラスの濃紺の玉などが出土する。中世に相当する14・15世紀には、本州でほとんどガラス玉が出土しないのに対し、北海道では急激に出土数が増加する。そのほとんどがカリ石灰ガラスであり、大陸の玉との関係が考えられることから、この時期の玉を手懸りとして北海道のガラス玉の変遷を流通面からも追究することが可能である。

(3) 北海道に伝世した蝦夷錦の金糸・銀糸の分析

北海道に伝来する蝦夷錦に使用されている金属糸の材質調査を行った。調査試料は茶地、紺地、赤地蝦夷錦の端布、蝦夷錦の雑刀袋、袱紗などに使用されている金属糸10点とした。調査内容は顕微鏡を用いた拡大観察および、蛍光X線分析による組成分析である。その結果、紙の片面に銀箔を貼り付けて細く裁断した平銀糸や、紙の片面に金箔を貼り付けて細く裁断した平金糸、芯糸に平銀糸が螺旋状に巻かれた撚銀糸や、芯糸に平金糸が螺旋状に巻かれた撚金糸などが

確認された。また、金箔や銀箔が剥がれた箇所は赤色を呈しているものもあり、組成分析の結果、鉄(Fe)が検出されたことから、紙にベンガラなどの赤い顔料を塗り、その上に金属箔を貼り付けて製作された可能性が推察された。

(4)北海道の出土銭貨の調査と成分分析

アイヌ社会にどのように銭貨が必要されたのか、特にその流入ルートの解明に力を注いだ。

釧路市の幣舞遺跡出土の銭貨を調査し、永楽通寶の存在などから本州からもたらされたものと推測した。北海道の銭貨は、複数の流入ルートが想定できるが、成分分析から見ても本州から持ち込まれた銭貨が多いと推定される。

(5)北海道から出土した青銅製品の錆の年代測定調査

北海道伊達市有珠オヤコツ遺跡からは、3枚の青銅製の鐺(No.1-3)が出土している。本研究においては、その年代を特定するために¹⁴C年代測定を試みた。一つ目の試料は鐺No.3の直下から出土した植物片である。測定結果は、 313 ± 18 [BP]であり、これは較正暦年代に換算すると1521~1641[cal AD]に相当する。近年、青銅器の表面に発生した緑青の¹⁴C年代測定法が開発されつつある。そこで、鐺No.2の裏面および鐺No.3の表面より採取された緑青についても測定を行った。結果は、 369 ± 20 [BP]であり、1462~1617[cal AD]の較正暦年代に相当し、植物片の結果とよく一致するものであった。また、鐺No.1の裏面より採取された緑青についても測定を実施した。結果は、 1163 ± 21 [BP]であり、779~936[cal AD]に相当する。この年代は、他の2資料より古い値を示している。その原因の詳細については不明であるが、土壌等の不純物の影響などが考えられる。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計14件)

中村和之、「北からの蒙古襲来」について - モンゴル帝国の北東アジア政策との関連で -、歴史と地理、677号、2014年、1-14頁、査読無。

中村和之、中世・近世アイヌ論、岩波講座日本歴史、20巻、岩波書店、2014年、117-138頁、査読無。

泉吉紀・酒井英男、考古遺物の熱履歴を残留磁化から探る研究、情報考古学、20巻1-2号、2014年、1-7頁、査読有。

越田賢一郎・乾芳宏・竹内孝・高橋美鈴・中村和之、北海道余市町大川遺蹟から出土したガラス玉等の成分分析、札幌国際大学紀要、46号、2015年、107-114頁、査読無。

柳瀬和也・松崎真弓・澤村大地・森岡健治・中井泉・中村和之、蛍光X線分析による北海道で出土した続縄文時代の古代ガラスの特性化、分析化学、64巻5号、2015年、371-377頁、査読有。

К. Накамура, К.Косида:Ввоз стеклянных бусин на Хоккайдо.Исторический контекст, *Средневековые Древности Приморья, Выпуск 3, 2015, с.351-363.* (中村和之・越田賢一郎、北海道におけるガラス玉の流入の歴史的背景、中世沿海州の遺物、3号、2015年、351-363頁) 査読無。

К. Накамура:Бзаимоотношения между монгольской империей и аборигенными наподоми нижнего приамурья и сахалина, *Средневековые Древности Приморья, Выпуск 3, 2015, с.389-395.* (中村和之、アムール川下流域・サハリン島の先住民とモンゴル帝国との関係、中世沿海州の遺物、3号、2015年、389-395頁) 査読無。

中村和之、アイヌ考古学と歴史教育、季刊考古学、133号、2015年、76-79頁、査読無。

Т. Исибаси, К. Накамура, Т. Такэути, К. Косида:Анализ бусин, обнаруженных в районе Хатиман города Исикари на острове Хоккайдо, *Вестник Сахалинского Музея, No.22, 2015, с.98-126.* (石橋孝夫・中村和之・竹内孝・越田賢一郎、石狩市八幡出土のガラス玉の分析、サハリン州博物館紀要、22号、2015年、98-126頁) 査読無。

石川朗・三宅俊彦・中村和之、北海道釧路市幣舞遺跡から出土した銭貨の調査と分析、釧路市立博物館紀要、36号、2016年、1-6頁、査読無。

小林淳哉・中村和之、緑青の発生した古銭の表面組成から内部組成の推定、出土銭貨、36号、2016年、38-42頁、査読無。

Т.Миякэ, К.Накамура: Находки Китайских и Японских монет на Сахалине, *Вестник Сахалинского Музея, No.23, 2016, с.54-89.*(三宅俊彦・中村和之、サハリン島出土の中国銭貨と日本銭貨の調査、サハリン州博物館紀要、23号、2016年、54-89頁) 査読無。

馬場慎介・柳瀬和也・今井藍子・中井泉・小川康和・越田賢一郎・中村和之、北海道出土アイヌ文化期のガラス玉の化学組成分析、函館工業高等専門学校紀要、51号、2017年、48-67頁、査読有。

泉吉紀・酒井英男・中村和之・斉藤大朋、地中レーダによるチャン跡の探査研究、函館

工業高等専門学校紀要、51号、2017年、68-73頁、査読有。

〔学会発表〕(計4件)

浪川健治、不作忌避の禁忌と豊穡祈、米沢史学会、山形県立米沢女子短期大学、2014年10月18日。

三宅俊彦、日本学者従出土文物研究中国の経済和軍事歴史、香港中文大学国際中国学会、2015年3月10日。

K. NAKAMURA, The Circulation of Chinese Coins in Hokkaido and Sakhalin from the 15th Century onward, *The 3rd Congress of AAWH (Asian Association of World Historians), Singapore, 30th May 2015.*

中村和之、大モンゴルとアイヌ、第54回中世史サマーセミナー、北海道大学、2016年8月26日。

〔図書〕(計2件)

瀬川拓郎、アイヌ学入門、講談社、2015年、全311頁。

瀬川拓郎、アイヌと縄文 - もうひとつの日本の歴史、筑摩書房、2016年、全237頁。

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中村 和之 (NAKAMURA, Kazuyuki)
函館工業高等専門学校・一般人文系・教授
研究者番号：80342434

(2) 研究分担者

酒井 英男 (SAKAI, Hideo)
富山大学・大学院理工学研究部(理学)・教授
研究者番号：30134993

小林 淳哉 (KOBAYASHI, Jun-ya)
函館工業高等専門学校・物質環境工学科・教授
研究者番号：30205463

小田 寛貴 (ODA, Hirotaka)
名古屋大学・宇宙地球環境研究所・助教
研究者番号：30293690

浪川 健治 (NAMIKAWA, Kenji)
筑波大学・人文社会科学研究科・教授
研究者番号：50312781

三宅 俊彦 (MIYAKE, Toshihiko)
淑徳大学・文学部・教授
研究者番号：90424324

(3) 連携研究者

越田 賢一郎 (KOSHIDA, Ken-ichiro)
札幌国際大学・人文学部・教授
研究者番号：70585710

佐々木 利和 (SASAKI, Toshikazu)
北海道大学・アイヌ文化研究センター・特任教授
研究者番号：80132702

(4) 研究協力者

瀬川 拓郎 (SEGAWA, Takuro)
旭川市博物館・館長

中田 裕香 (NAKADA, Yuka)
北海道教育委員会・主査

塚田 直哉 (TSUKADA, Naoya)
上ノ国町教育委員会・学芸員

乾 哲也 (INUI, Tetsuya)
厚真町教育委員会・学芸員

竹内 孝 (TAKEUCHI, Takashi)
函館工業高等専門学校・元技術職員

森岡 健治 (MORIOKA, Kenji)
平取町教育委員会・学芸員

田口 尚 (TAGUCHI, Hisashi)
北海道埋蔵文化財センター・調査課長

吉田 澪代 (YOSHIDA, Miyo)
金城学院大学・非常勤講師